

★歴史愛好家のための日本の歴史シリーズ★

豊臣秀吉になつた男の一生と安土桃山時代



目次

発刊にあたって	1
---------	---

太宰 観

年表	3
----	---

第二章 豊臣秀吉の出生記	5
--------------	---

く本当に農民の子として生まれたのかく

太宰 観

はじめに

一、秀吉の出生地の地勢と故郷

二、秀吉父系のルーツ

三、豊臣秀吉の父系にみる技術・情報・家柄の相関構造

四、豊臣秀吉の母系のルーツ

五、父母系の縁者

六、豊臣秀吉の商人気質と越境的資質

おわりに

コラム① 秀吉の養子たち	23
--------------	----

く秀吉に翻弄された人生の果てにく

正本 景造

第二章	木下藤吉郎秀吉の青年時代	27
-----	--------------	----

小山 森郎

はじめに

- 一、信長の草履取り
 - 二、小者から足輕へ
 - 三、勅使接遇
 - 四、薄縁ヲ敷キ祝言シツル
 - 五、墨俣一夜城のこと
 - 六、信長上洛、箕作城攻めのこと
- おわりに

コラム②	豊臣の「まんかかさま」ねね	39
------	---------------	----

白石 ひとみ

第三章	信長包围網・仏教相論	41
-----	------------	----

正本 景造

はじめに

- 一、最前線
 - 二、包围網の勝ちパターンとは
 - 三、信長包围網の光と影
- おわりに

コラム③	逆名利君の人、竹中半兵衛	51
------	--------------	----

中田 学

第四章 長浜城主 羽柴秀吉

吉田 誠一

はじめに

- 一、朝倉氏・浅井氏の討伐
- 二、秀吉大名になる／長浜城の築城
- 三、秀吉による長浜統治と国友鉄砲鍛冶
- 四、羽柴への改姓と筑前守任官
- 五、柴田勝家との確執そして中国方面軍司令官へ
おわりに

53

コラム④

「静謐」の茶

太宰 観

61

第五章

秀吉の中国攻め

／中国大返しを検証する／

山下 俊之

63

はじめに

- 一、備中高松城攻め
- 二、本能寺の変
- 三、変の知らせと諸将の動き
- 四、毛利との和睦
- 五、中国大返し
- 六、中国大返しを検証
おわりに

コラム⑤	闇の本能寺　　く消えた信長く	71
------	----------------	-------	----

渡邊 浩一郎

第六章	中国大返し　　く神速その先へく	73
-----	-----------------	-------	----

玉木 造

はじめに

- 一、宇喜多家の命運をかけた戦・備中高松城攻め
- 二、本能寺の変
- 三、大返し開始
- 四、大返しにおける海路活用説
- 五、秀吉の「神速」と戦略
- 六、山崎の戦い
- 七、洞ヶ峠と池田恒興の奇襲
- 八、不可解な光秀の最期
- 九、何故、毛利軍は秀吉を追撃しなかったのか？
おわりに

コラム⑥	黒田官兵衛の栄光と限界	89
------	-------------	-------	----

中田 学

第七章 豊臣秀長 〽見えない「徳」を残した稀代の補佐役〽 91

正本 景造

はじめに

一. 同僚にして「弟」

二. 兄弟の飛躍

三. 天下一統の副将

四. 天下の指南役

おわりに

コラム⑦ 藤堂高虎 〽本当の「我」を押しとおした男〽 107

正本 景造

第八章 転換点としての清洲会議 111

中田 学

はじめに

一. 清洲会議と清須会議

二. 「清洲」と称された会議以外の出来事

三. 清洲会議開催までの経緯

四. 忘れられがちな織田信忠の存在

五. 清洲会議の決着とその意義

おわりに

コラム⑧ 蒲生氏郷 〽レオンの約束の地〽 121

太宰 観

第九章 賤ヶ岳戦役での秀吉 〓 現地レポを織り交ぜて〓 125

鈴木 淳

はじめに

一. 織田政権の抱える火種

二. 開戦

三. 戦線は湖北へ

四. 決戦Ⅰ 〓 守 〓

五. 決戦Ⅱ 〓 破 〓

六. 決戦Ⅲ 〓 離 〓

おわりに

コラム⑨ 槍の又左衛門が築いた百万石の石垣 141

太宰 観

第十章 秀吉の大坂城築城と首都構想 145

鈴木 淳

はじめに

一. 淀川水系を巡る政庁と都市

二. 大坂の生い立ち

三. 都市空間「大坂」の出現 〓 豊臣家のホームタウン 〓

四. 増殖する首都圏

おわりに

コラム⑩ 堀秀政 〓 「運が微笑む」機会に立ち会い続けた「名人芸」 〓 159

正本 景造

第十一章 小牧・長久手の戦い ～家康はなぜ秀吉に無謀な戦いに挑んだのか～

中田 学

はじめに

- 一. 「小牧・長久手の戦い」という呼称
 - 二. 秀吉と信雄との蜜月から対立へ
 - 三. 三家老の誅殺そして犬山城奪取
 - 四. 家康、小牧山に布陣す
 - 五. 羽黒の戦い
 - 六. 三河中入り
 - 七. 長久手の戦い
 - 八. 池田家にとって「小牧・長久手の戦い」は是か非か
 - 九. 本多忠勝と佐久間盛政／秀吉の武将観
 - 十. 秀吉の戦略的苦境と戦局の膠着
 - 十一. 和睦への道
 - 十二. 和睦と家康の深慮
- おわりに

163

コラム⑪

秀長総大将に祭り上げられる！ 四国攻めの舞台裏

吉田 誠一

177

第十二章

中世を終わらせた秀吉の検地と刀狩り

吉田 誠一

179

はじめに

- 一. 中世の土地制度
- 二. 検地① 検地とはなんぞや？その目的は？
- 三. 検地② 太閤検地以前の検地
- 四. 検地③ 太閤検地



- 五. 検地④ 太閤検地以後の検地
 - 六. 刀狩り① 刀狩り以前の農村の武装
 - 七. 刀狩り② 秀吉の刀狩令
 - 八. 刀狩り③ その実態
 - 九. 刀狩り④ その目的
 - 十. 刀狩り⑤ 江戸時代の庶民の帯刀事情
 - 十一. 刀狩り⑥ 鉄砲の取り締まり
- おわりに

コラム⑫

太閤検地を科学する

山下 俊之

199

- 一. 太閤検地による石高
- 二. 石高ベストテン
- 三. 太閤検地を科学する

第十三章

豊臣秀吉の九州平定とキリスト教政策

白石 ひとみ

203

- はじめに
- 一. 戦国末期の九州 ―大友・島津・龍造寺―
 - 二. 九州とキリスト教
 - 三. 豊臣秀吉による九州平定戦
 - 四. 伴天連追放令
 - 五. 伴天連追放令発令後の九州情勢とキリシタン
 - 六. 一五九〇年代の対外交渉とキリスト教政策―サン・フェリペ号事件と二十六聖人の殉教―
 - 七. キリスト教政策は江戸幕府にどう引き継がれたか
- おわりに



はじめに

- 一、惣無事令（そうぶじれい）
- 二、北条氏の惣無事令違反①　宇都宮攻め
- 三、北条氏の惣無事令違反②　名胡桃城事件
- 四、真田昌幸（ままだまさゆき）のリスクヘッジ
- 五、豊臣秀吉による沼田裁定
- 六、小田原征伐前夜の蛙告（けいこく）
- 七、小田原城への進軍（山中城と葦山城）
- 八、小田原城包囲陣の陣容
- 九、一夜城の真実
- 十、石垣山城でのエピソード2つ
- 十一、小田原城開城までの経緯
- 十二、その後の北条氏
- 十三、鎌倉での秀吉
- 十四、江戸の見分
- 十五、結城城への立ち寄り
- 十六、宇都宮仕置
- 十七、奥州仕置
- 十八、葛西・大崎一揆
- 十九、問題児・伊達政宗、決死のパフォーマンス
- 二十、鶴鶴押印事件
- 二十一、三成の策
- 二十二、九戸政実の乱

二十三、奥州再仕置軍の派遣
二十四、九戸政実の乱終結と天下統一の完了
おわりに

コラム⑭

悲劇の関白 豊臣秀次

吉田 誠一

251

第十五章

大航海時代と朝鮮出兵

〜耳塚にて思う事〜

玉木 造

253

はじめに

- 一、海外侵攻をしたがらない武士たち
 - 二、型破りな武士・信長
 - 三、トルデシリヤス条約
 - 四、サラゴサ条約
 - 五、遠大なる構想
 - 六、スペインの侵攻戦略
 - 七、妄想から構想へ
- おわりに

コラム⑮

ポルトガル・オランダの古記録からみた戦国時代

アマリコ

265

第十六章

太閤記の終焉

〜難波のことも夢のまた夢〜

太宰 観

269

第十七章 豊臣秀吉の家臣と越境人材

太宰 観

はじめに

一. 家臣【一門衆】

二. 家臣【譜代衆】

三. 越境人材

著者・略歴

装丁について

273

319

321

発刊にあたって

太宰 観

歴史には謎がつきものである。

歴史とは過去に起きた記録の解説ではなく、一つの事象に内在する人の想いや行い、忘れ去られた記憶、語り直される伝承が交錯し、虚像と実像が織りなす深い問いである。

歴史は自らに問い質す者にのみ鍵を授ける。その行いは最良の教師であり、不完全な語り部である。そして多くの語り部は、耳を傾ける者に曖昧な謎を残して去っていく。豊臣秀吉もまた、数多の歴史的事件を語りながら、謎を残して去った語り部の一人である。陽気で掴みどころのないその人柄に、人は惹かれ、魅了されてきた。

「人蕩し」と呼ばれた秀吉は、多くの人々と心を通わせたが、その出生や実像を伝える史料は驚くほど少ない。

江戸初期の『太閤記』は、秀吉を描きつつも虚構を纏わせ、後世に伝えられた像は能楽の仮面のように、前半は猿面冠者として親しみを誘い、後半は冷酷な独裁者として不安を煽る。仮面の下の素顔は、語ることを禁じた別の語り部によって霧の中に隠され、歴史の奈落へと追いやられた。

だが、その霧の中に隠された秀吉の素顔を見たいと願う者は、

今も少なくない。私もまた、その一人である。秀吉の実像とその謎に満ちた歴史に新たな光を当てたいと願うのである。秀吉が何者であり、何を願い、何を遺したのか。彼の時代に生い茂った草木も、想いの限りを尽くして建てた建築物も、その素顔を知る人々も今は過去へと旅立ったが、時代を越えてもまだ、秀吉は私の様な歴史愛好家の願いを聞き入れ、語り部を続けてくれる。

この本は、そんな願いを胸に抱いた現代の語り部（歴史愛好家）たちが集い、残された資料を読み解き、伝承の声に耳を傾け、史跡を歩むことで、秀吉の素顔を確かめる歴史巡礼とも呼べる旅の記録である。それは、過去と現在をつなぐ道を歩むことであり、歴史の影に隠れた彼の声を聴くことであり、歴史という名の深い森に分け入る行為である。その行為は、秀吉という一人の間人を知ることにとどまらない。それは、時代のうねりの中で秀吉と共に抗って生きた人々の願いと諦めを拾い集めることであり、歴史とは何か、人間とは何かを問い直す旅でもある。その旅の果てに、私たちと読者は何を見出すのか。それは、まだ誰にもわからない。だが、歩みを止めずに歴史を学び、問い続けることこそが、歴史に向き合う者の誠実さであり、終わりのない歴史巡礼の旅の始まりなのだと思う。

大河ドラマ「豊臣兄弟」の主演は、秀吉の素顔と謎を最も知る弟・秀長である。秀長の物語は、常に秀吉の足元に立ち、願望と陰謀、静謐と争乱、栄光と盛衰が交錯する舞台に秀吉を光として

立たせ続け、自らは影として黒子に徹した物語と云える。

本書の主題である安土桃山時代は、信長・秀吉・家康がそれぞれの手法で社会課題に挑み、近世日本の礎を築いた転換期である。封建的分権から中央集権への移行、利権を巡る複雑な社会構造、爛熟する桃山文化、楽市・楽座による自由経済の拡大、西欧技術の導入による戦術革新、宗教統制による社会安定、そして太閤検地・刀狩令による兵農分離と石高制の確立。これらの施策は家康に継承され、江戸幕府の長期安定へと繋がった。これらの信長や秀吉、家康が抗った世相は必ず、数百年周期で訪れる。

我々が生きる現代社会は、既得権益層や大企業・宗教・メディア・官僚・海外勢力が複雑に絡み合い、戦国時代以上に混沌としている。税負担は庶民に偏り、富は一部の既得権益層(屈した者)と国外に流出している。このような時代にこそ、国を愛し、死をも顧みない「名もなき者」(屈しない者)の結束と覚悟が求められている。歴史はまた繰り返されるだろう。

かつての「名もなき者」の代表が豊臣秀吉であった。

彼を神輿に担いだ男たちの多くは、泰平の世であれば出世の夢すら描けなかった「名もなき者」たちであった。だが彼らは、時代の混沌の中で力と知恵を結集し、幾度もの奇蹟を起こし、ついに戦乱を終わらせ、多くの民が願う社会を築き上げた。

では、その「民が願う社会」とは何か。今を生きる我々は、歴

史という教師から再びその問いを投げかけられている。そして我々は、いま何を為すべきなのかを問われているのである。

本書を編む我々、歴史愛好家もまた、秀吉と同じく現代に生きる「名もなき者」である。同じ立場に立つ者として、秀吉と彼を支えた「名もなき者」たちが遺した鍵を読者と分かち合い、問う事が始まる歴史巡礼の旅を共に歩みたいと願う。どうか最後までお付き合いいただければ幸いである。

最後に、本書刊行にあたりご執筆を賜った諸氏、ならびにご支援くださった出版編集部の皆様に、心より感謝申し上げます。

令和七年十二月

太宰 観

宇初

年 表

1537年	織田家の奉公人・木下弥右衛門昌吉と関兼員の次女・お仲の長男として尾張国(現・愛知県)に生まれる
1554年	織田信長に仕官
1560年	桶狭間の戦いに参戦
1561年	杉原定利と朝日殿(秀吉の従姉妹)の長女・お寧々(浅野長勝の養女)と結婚
1562年	織田家の足輕百人組頭になる
1563年	普請奉行となって清洲城修築
1565年	信長、美濃坪内氏に朱印状を発給し、秀吉、副状を発行(秀吉文書初見)
1566年	美濃国・墨俣城を一夜にして築く(別名:墨俣一夜城)
1567年	家臣・堀尾吉晴が地元農民からの情報により稲葉山城の裏道に秀吉を案内し、織田軍の稲葉山城攻略戦を勝利に導く
1569年	京都奉行に就任
1570年	金ヶ崎における浅井・朝倉両軍からの撤退戦で殿軍を務める
1573年	浅井氏・小谷城攻略戦の勝利に貢献 戦後、浅井氏旧領・江北三郡を得て十二万石の大名となる (「木下姓」から「羽柴姓」改姓)
1574年	地名を今浜から「長浜」と改め、「長浜城」を築城
1577年	信長から「毛利征伐」の総司令官に任命され、「中国経略」開始
1578年	播磨国三木城を兵糧攻め「三木の干殺し」開始
1580年	三木城攻略に成功する
1581年	「姫路城」築城、鳥取城攻略「鳥取干殺し」に成功する
1582年	備中国高松城を水攻めで攻略 「本能寺の変」主君・織田信長が明智光秀の謀反で横死 変の一報を受け、毛利氏と和議後、「中国大返し」を敢行 「山崎合戦」で明智光秀を破る 「清須会議」で織田信長の跡継ぎに三法師を推薦 「太閤検地」を開始、大徳寺で織田信長の葬儀実施

年 表

1583年	「賤ヶ岳合戦」で柴田勝家を破り、「北ノ庄城攻略戦」で柴田家を滅ぼす(秀吉の覇権確立) 居城「大阪城」の築城工事を開始
1584年	「小牧・長久手合戦」で徳川家康・織田信雄に敗北
1585年	紀州国平定(根来・雑賀一揆を鎮圧) 関白に任命 「四国」「中部」「北陸」の平定に成功
1586年	徳川家康と秀吉妹・朝日姫の結婚 徳川家康が秀吉に臣従 「豊臣」に改姓後、太政大臣に就任
1587年	「九州」を平定、北野大茶会開催 「バテレン追放令」施行
1588年	浅井長政・お市の長女である茶々(淀殿)を側室に迎える 「刀狩令」「海賊取締令」を施行 京都東山に「方広寺大仏殿」建立
1590年	「小田原の役」に勝利し、後北条氏が滅亡 「奥州」平定により豊臣秀吉は天下統一を達成 朝鮮使を聚楽第にて引見
1591年	関白職を秀次に譲り、太閤と称する 実弟・豊臣秀長が郡山城内で没する 「唐入り」を決意
1592年	第一次朝鮮出兵(文禄の役)、肥前名護屋城に在陣 母・大政所(お仲)没する
1593年	嫡子・豊臣秀頼の誕生(淀殿の子)
1594年	豊臣秀次と吉野に花見
1595年	秀次を高野山に追放後、謀反の罪で切腹を命じる 諸大名血判起請文を提出 サン・フェリペ号事件
1597年	第二次朝鮮出兵(慶長の役)
1598年	豊臣秀吉が伏見城で没する(享年62歳)
1599年	朝廷より「豊国大明神」の神号、「豊国廟」に祀られる

第一章 豊臣秀吉の出生記

（本当に農民の子として生まれたのか）

太宰
観

第一章 豊臣秀吉の出生記

「本当に農民の子として生まれたのか」

太宰 観

はじめに

本当に豊臣秀吉は貧しい農民の子であったのか。

江戸時代から令和の現代に至るまで、豊臣秀吉の出生については「尾張の貧しい農民出身」というのが通説である。書籍やインターネットを介して広く流布されており、著名な歴史研究者においても、当該説を「事実」として言及している例が見受けられる。

しかしながら、秀吉の「農民出身説」が長らく通説として扱われている一方で、何の縁故もなく織田家に仕えて十数年の経歴しか持たない人物が、読み書きや算学を含む多様な資質が要求される京都奉行など要職を担うに至った事実について私は疑問を感じていた。私はこれまで、この通説を支持するに足る十分かつ明確な根拠を見出せておらず、本稿を書くにあたり、この疑問を解くべく、年初から史跡調査、文献の読み込み、インターネット検索、さらに AI を活用し、従来の通説と私の調査結果との比較・検証を進めてきた。

調査が進むにつれて、従来の「農民出身説」への疑問がさらに

深まり、異なる視点からの出生仮説を立てたいという考えが芽生えてきた。

豊臣秀吉の出生に関する通説の一端を担ってきた史料として、江戸時代前期に成立した『太閤素生記』^{〔注1〕}が挙げられる。本書は、同時代に編纂された小瀬甫庵の筆による「太閤記」^{〔注2〕}と並び、後世の『絵本太閤記』等の関連文献に多大な影響を与えた原典的存在である。特に、秀吉の出生や幼少期の逸話を豊富に収録しており、彼の「農民出身説」を補強する記述が散見される点は注目に値する。

しかしながら、『太閤素生記』の記述には多分に脚色や創作が含まれており、英雄神話的構造に基づく物語性が強く、史実との乖離が顕著である。たとえば、秀吉の父とされる木下弥右衛門の死去を天文十二年一月二日（一五四三年二月五日）とする一方で、秀長の誕生をそれ以前とする記述が存在する。実際の秀長の生年月日は天文九年三月二日（一五四〇年四月八日）であり、両者の関係性において明確な年代的矛盾が確認される。加えて、本書の編纂過程にも史料の信頼性を損なう要素が多分に含まれている。また『太閤素生記』の著者は当初不詳であったが、後に旗本・土屋知貞とされ、徳川家康や秀吉に縁を持つ養母・祖母の伝聞をもとにした「聞書」形式で構成されている。出版背景には営利的意図が指摘されており、一次史料としての検証性に乏しい。これに対し、太田牛一による『信長公記』は同時代の記録に基づく実証

的史料であり、比較対象としての信頼性において大きな差異がある。

本稿の執筆においては、筆者である私自身による史料評価および仮説的考察に加え、A Iによる客観的検証を併用した。検証の結果、筆者と同様に A Iもまた「豊臣秀吉農民出身説」について、史実に基づく信憑性は低いとの判断を示しており、これは筆者の仮説を補強する有力な補助資料となったと考えている。

これらの検討を踏まえると、『太閤素生記』は、秀吉像の形成において文化的・思想的影響を及ぼした文献であることは否定し得ないが、歴史学的観点から見た一次史料としての価値は限定的であり、実証的な史実解明に資する史料とはいえない。加えて、『太閤素生記』を含む秀吉の出生に関する諸文献の多くは、徳川政権下の江戸時代に成立したものであり、その性格は学術的記録というよりも、当時の読者層の興味関心に応える娯楽的読み物であったと推察される。これらの書物は、明治期以降に西欧歴史学の方法論を導入した近代歴史学者による実証的研究とは異なり、物語性や娯楽性を重視した自由な描写が特徴である。

本稿では、豊臣秀吉の出生に関する最新の歴史研究書ならびに先行研究の成果を参照しつつ、従来の通説に再検討を加え、新たな出生仮説の構築を試みるものである。

一・秀吉の出生地の地勢と故郷

後に位人臣を極め、関白太政大臣にまで登り詰めた豊臣秀吉は天文六年（一五三七年）二月六日、織田家の足軽であった木下弥右衛門と関兼員の次女である後の大政所（天瑞院）お仲との子として尾張国（現・愛知県）に生まれた。

秀吉が生まれた尾張国は日本武尊の副官である建稲種命（尾張氏）が治めていた時代から皇女を輩出し、天皇家の三種の神器の一つ「草薙剣」を尾張氏が任され、それを祀る熱田神宮が置かれるほど、古代から天皇家との結びつきの深い土地であった。律令制が敷かれた時代から木曾山系を源流とする木曾川、長良川、揖斐川、庄内川のミネラル豊富な水源と国の大部分を占める濃尾平野（沖積平野）の肥沃な土壌の恩恵を受け、稲作を中心とした日本有数の農業生産国であった。このように元々、土壌が良いことから水利工事も積極的に行われた歴史があり、大和朝廷を支える律令国として重きを成した国であった。

秀吉は尾張国の中村郷（中々村）に生まれ育ったと『太閤記』^{〔注3〕}「太閤素性記」「祖父物語」に記されている。中村郷は尾張国の中でも奈良の時代から今日に至るまで東国から西国へと至る街道の宿場町として栄えた歴史がある。

その歴史的背景から行商人や他国者が住みつきやすい地域としての歴史があり、所謂、人と情報の流れが早い商地としての役割を担っていた土地柄であったと考えられる。秀吉が幼少期を過

装丁について

本書の装丁は、歴史 MIND で執筆もされているアマリコ氏によつて手がけられました。

表表紙

「いちのたばりうしろだてつきかぶと
「一の谷馬蘭後立付兜」をかぶり、信長から拝領したと伝わる
もっこうきりもんひらしやじんばおり
「木瓜桐文緋羅紗陣羽織」を羽織った身体に、微笑んでいるがその
瞳にはむきだしの野望と狂気の光を放っている顔の「秀吉」を
想像しております。

裏表紙

満月の下、中国大返しの上、息をひそめ甲冑がする音のみをたてて山崎に集結している騎馬武者や足軽・雑兵達を描くことで、山崎合戦の前の静けさを表現しております。

裏表紙



表表紙



★歴史愛好家のための日本の歴史シリーズ★

豊臣秀吉になった男の一生と
安土桃山時代

2025年 12月 15日 初版 1 刷発行

企 画：歴史 MIND

株式会社 AndTech

発行者：陶山正夫

発行所：株式会社 AndTech

編集・制作：陶山正夫、岩崎正純

渡邊寿美

印刷・製本：倉敷印刷(株)